「孝」の物語～中国近世・日本近世の事例

松野　敏之
青木　洋司
許　家晟
原信太郎アレシャンドレ

序言

儒教の重要な特徴の一つに「孝」の重視が挙げられる。「忠」（君臣関係）と共に、具体的な人間関係の実践道徳として「孝」（父子関係）は重視されてきたものである。しかし、親を大切にすることは世界的に見られる考え方であり、ただ漫然と親子関係の大切さや「孝」の重要性を論じるだけでは儒教の特徴とは言い難い。「孝」が儒教の特徴と言えるのは、多くの研究でも指摘されている通り、家族制度として父母の孝養と祖先の祭祀崇拝とが重視され、さらには「孝」が人の存立根拠に関わるという強い自覚を抱きながら、理論的にも「孝」が重視されたきたことにあろう。またそれと同時に、倫理規範の根幹である「孝」をいかに実感するか、ということも考えられてきた問題であった。そのような「孝」の実感において、孝子の物語が重要な役割の一端を担ってきたことと思われる。今回の報告では、中国近世・日本近世において「孝」がいかに考えられてきたかということと、「孝」を実感させる物語はどのようにとらえられてきたかということについて検討を試みたい。

「孝」についてはいくつもの側面がある。『孝経』や『論語』などの経書に見える注釈、孝が関わる書や礼書に対する解釈、『孝子伝』や『二十四孝』のような孝子譚、朝廷による顕彰（旌表）を背景として報告される孝子の話、これに家・宗族や童蒙に対する教化を企図して編纂された教育書なども含まれるであろう。士人（読書人）と民衆とで好まれることや、語られる孝の物語も異なるであろう。報告者たちの力量では全面的な考察をすることは適わないため、中国近世および日本近世における個別事例を挙げながら、「孝」や「孝の物語」に関して整理してみたいと考える。

【報告一】松野敏之「唐宋における「孝感」物語」では、孝の物語のうち、六朝・唐に主として語られた孝感譚について、宋代の士

人たちがどのようにとらえたかということを報告する。唐から宋初にかけて見られる孝感に類する話を概観した場合、親の死に関連する話、親の希望をかなえようとする話、病に関わる話などが見られる。これらの観点のもとで、宋代の士人にも言及がある孟宗・郭巨・庾黔婁・王祥などの孝子の話をとりあげ、士人たちがどのように受けとめているかということを検討する。

大雑把な私見に過ぎないが、唐以前は孝子に瑞祥が起こることに注目されたとすれば、宋以降の士人は父母への孝養の尽くし方が語られるような話に注目していたと言える。心の用い方として具体的な親への孝養が関心の対象となっていくのであり、その意味で【報告二】【報告三】でとりあげる経書の解釈が、「孝」のとらえかたの基底となっていく。

【報告二】青木洋司「南宋末における『論語集注』学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章解釈」では、経書の注釈に示された「孝」の一端を明らかにするために、『論語』において、「孝」「仁」ともに初出である『論語集注』学而篇「孝弟也者、其為仁之本与」章の解釈を、南宋末の朱熹後学が、どのように受容したかについて検討する。そのために、『四書集注』以後の「四書」の注釈書の状況を確認し、第一に、朱熹後学の解釈を多く引用する趙順孫『四書纂疏』から、朱熹に教授を直接受けた輔廣、一世代後の蔡模を、第二に、朱熹とは異なる解釈への対応として、陸九淵の事例と、その展開として黄震を、それぞれ検討し、報告する。

【報告三】原信太郎アレシャンドレ「明代における『論語』学而篇「孝弟也者、其爲仁之本與」章解釈――陽明学者を中心として――」では、【報告二】に引き続き『論語』学而篇「孝弟也者、其爲仁之本與」の明代から清初に及ぶ解釈を報告する。明代中葉以降、朱子学的枠組みに対する反発が高まると同時に、さまざまな分野で「情」「情欲」の地位の上昇がみられたが、それは従来「情」の範疇に規定されてきた「孝」概念にも何らかの影響を与えたはずである。【報告三】はかかる問題を測定するメルクマールとして、主として陽明学者たちの『論語』当該章解釈に焦点を絞ってその変動を定点観測する。行論の手順として、明代の儒者にとって所与の前提であった『論語注疏』と『四書大全』の解釈を確認し、以降順次、王守仁（陽明）を初めとする諸家の注釈を検討していく。

【報告四】許家晟「花咲く「孝」―江戸初期をめぐって―」では、江戸時代の孝をテーマとして考察する。全体を三つの大枠に分類し、それぞれ「思想」「物語」「政策」としての「孝」について分析を加える。知識人（士）と民間（庶）との間に、孝に対する認識差、すなわち儒教理論に基づく孝と個人感情から出発する孝、という違いがある。また知識人の場合は、形而上の孝と形而下の孝など、様々な考えがあり、民間では、奇抜なものよりもリアリティのある物語が好まれることを取り上げる。一方、士と庶との間に、幕府の「孝」に関する政策がある。家の維持に重点を置く幕府の奨励策は、理論と感情の均衡点でもある。このような多面にわたる「孝」に対する関心は社会の発展と共に現れたものであり、これらについて検討を加えていく。